

紹介

中國における一九八〇年以降の鍾嶸《詩品》

研究概観(一)

——滋味説を中心として——

序

中國に於ける『詩品』研究状況については、既に尙定氏の「《詩品》研究概観」(一九八七年、『語文導報』)及び曹旭氏の「鍾嶸《詩品》研究綜述」(一九八九年、『文史知識』)という二篇の論文があり、その概観を知ることができる。しかし、この二文は、あくまで研究動態の紹介報告が主目的であるから、當然のことながら、各研究に對する批評はごく少なく、中國に於ける『詩品』研究の特徴はほとんど論じられていない。勿論、兩氏の「研究概観」、「研究綜述」が『詩品』研究の基礎資料として非常に有益なものであることは言うまでもないが、今後の『詩品』研究の方向やあり

紹介

方を定め、より飛躍的な發展を期すためには、従前の各研究に對して逐一慎重な検討を加え、その長所缺點を明確にすることが一層有効であると思われる。そこで、この小論を始めとする一連の拙論では、この點に留意しつつ、主として中國に於ける近十年、つまり一九八〇年以降の『詩品』研究状況について検討していくことにする。

中國に於ける近年の『詩品』研究は、上記の曹旭論文によると、三期に分けられている。

第一期は、一九二六年から一九四九年までの二十四年間。この期間には、張陳卿の『鍾嶸詩品之研究』(一九二六年)を始めとして、陳延傑『詩品注』(一九二七年)・古直『鍾記室詩品箋』(一九二八年)・許文雨『詩品釋』(一九二九年。改題『鍾嶸詩品』)等、十數部の『詩品』研究專著が陸續と著されている。それ故、この時期は、曹氏の言うとおり、まさしく現代『詩品』研究にとつての『發軔期(出發期)』(『鍾嶸《詩品》綜述』)であり、『興盛期』(同前)であると規定できよう。この期の研究專著は、それ以前には『詩品』の注釋・校勘等がまったくなく、零からの出發に近かったので、

確かに相當の進展があり、一定の成果が擧がったと言える。しかし、方法論的には、ほとんど裴松之の『三國志注』・劉孝標『世說新語注』・李善『文選注』の方法と同じ典據・出典探索による古典的注釋の域を出るものではなかった。その上、なおたとえば上品序に「曹公父子、篤好斯文、平原兄弟、鬱爲文棟」とある「平原兄弟」を「陸機陸雲」と解する初歩的な誤謬や「序」の位置に關する重大な疑問點なども多く存在していたから、量的にはともかく、質的には、他の作品研究に比して、決して十分に満足のいく研究水準に達しているとは言い難い状態であつた。

第二期は、一九五〇年から一九七九年までの三十年間。文化大革命の十年間を含む「解放」以後のこの時期は、わずかに二十餘篇の論文があるだけで、まったく見るべき成果がない。まさしく『詩品』研究の『涸落』（同前）の時期と言えよう。反面、政治と文學研究の相關關係については興味深い時期である。

第三期は、一九八〇年以降。

この十年餘の間に、梅運生『鍾嶸和詩品』（一九八二年上

海古籍出版社）・蕭華榮『詩品注釋』（一九八五年中州古籍出版社）・呂德申『鍾嶸詩品校釋』（一九八六年北京大學出版社）・向長青『詩品注釋』（一九八六年齊魯書社）・趙仲邑『鍾嶸詩品譯注』（一九八七年廣西人民出版社）・徐達『詩品全釋』（一九九〇年貴州人民出版社）という六部の專著と百餘篇に及ぶ論文が書かれている。まさに『詩品』研究の『復蘇時期（復興期）』（同前）と呼ぶにふさわしい。

第一・二期の成果は、すべて第三期の研究に吸収されているので、中國に於ける現代『詩品』研究の現狀を認識し、今後の方向性を探るためには、一九八〇年以降の研究を調査検討すれば十分ということになる。それ故、この一連の拙論では、主に一九八〇年以降のそれを對象として取り上げることにしたのである。その際、日本の『詩品』研究も視野に入れながら検討していくつもりであるが、奇妙なことに、日本の『詩品』研究は、中國と違い、一九八〇年以前には盛んであつたが、以後は小休止の如き状態を呈している。日本における研究に關しては基本的には一九八〇年以前の論著を比較の對象とする。

尙定氏の「『詩品』研究概観」は、近年の『詩品』に関する諸研究を内容上から分析して、

一、鍾嶸の生卒年、身世と『詩品』成書年代の考訂

二、『詩品』の注釋に關するもの

三、理論研究 A. 『詩品』の地位問題に關するもの

B. 『詩品』の審美規準と批評原則に關するもの

るもの

C. 『詩品』批評方法の優劣に關するもの

D. 『詩品』中の作家の品第に關するもの

E. 『詩品』の比較研究に關するもの

の如く分類している。一方、曹旭氏の『鍾嶸《詩品》研究綜述』は、同じ内容上の分類を次の如くに分けている。

一、鍾嶸の生卒年問題に關するもの

二、三品の不公平と陶詩が應據に出ているとすることに

關するもの

三、『詩品』と《文心雕龍》の文學觀の異同に關する論争

四、『滋味說』及び其の他に關するもの

一見、尙定氏の方が、概括的な分類で、『詩品』研究のすべ

ての問題を網羅しているように見えるが、實際に紹介報告している内容を見ると、曹旭氏の示す具體的、個別的な分類とあまり變わるころはない。一連の小論では、便宜上、主に簡便な曹旭氏の分類に準據しつつ、不足するところは尙定氏の分類によって補足し、各項目別にそれぞれの研究をとりあげ、その特徴を分析していくことにする。

一、「滋味說」關連の論文について——「滋味說」の存在

中國に於ける『詩品』研究論文中で最も多く論じられてきたテーマは、所謂「滋味說」に關するものであるから、「滋味說」が中國の『詩品』研究者の最も關心あるテーマの一つであることは間違いない。ところが、この「滋味說」に關しては、中國以外では一歐米は言うに及ばず、とりわけ鍾嶸『詩品』に關する研究が相當進んでいる日本や韓國に於いても、まったく論じられていないから、これは中國獨自の關心事であり、中國に於ける『詩品』研究の一特色を示すものと見てよからう。それ故、中國の『詩品』

研究の特色を究明し、その長所缺點を明確にして、今後の方向性を模索せんとする試みの第一歩として、先ず、この「滋味説」に關する論文の検討から着手することにした。中國において、直接「滋味説」「詩味説」と表現されている場合もあるを論じた、主な論文には、次のようなものがある。

①吳調公「說詩味——鍾嶸的詩歌評論及其美學理想」《江漢學刊》一九六三年九期

②李傳龍「論鍾嶸的『滋味』說」《文學評論》一九七九年三期

③高起學「淺談鍾嶸的詩味説」《人文雜誌》一九八〇年二輯

④武顯漳「淺談鍾嶸的『滋味』說」《思想戰線》一九八〇年三期

⑤陳建森「鍾嶸的美學思想——『滋味』」《河池師專學報》一九八二年一期

⑥郁源「鍾嶸『詩品』『滋味』解」《江漢論壇》一九八三年二期

⑦丁捷「指事造形、窮情寫物——鍾嶸《詩品》的『滋味』説」《鄭州大學學報》哲社版一九八四年一期

⑧王之望「鍾嶸與司空圖『味』說辨」《牡丹江師院學報》一九八五年一期

⑨齊魯青「論鍾嶸開創的『滋味説』」《內蒙古大學學報》一九八五年二期

⑩蔣祖怡「鍾嶸的『滋味説』對我國詩歌發展的作用」《杭州大學學報》一九八五年四期

⑪王小剛「從接受美學理論看鍾嶸的『滋味』説」《河池師專學報》一九八七年四期

⑫蔡育曙「鍾嶸的『滋味』説」《雲南民族學院學報》一九八七年二期

⑬李天道「『滋味』與『興象』——《詩品》《河岳英靈集》沿革比較研究」《青海師範大學學報》一九八九年一期

⑭韓進廉「辨于味而可以言詩也——評鍾嶸『滋味』說的審美價值」《河北師範大學學報》社科版一九九〇年一期

⑮李艇「論鍾嶸的詩歌批評標準——兼『滋味説』」《喀什師範學院學報》一九九〇年四期

⑯姜小青「『滋味』解説」《文史哲》一九九一年一期
これらの諸論文は、共通して、鍾嶸は「批評的美學標準」

及び「創作的美學原則」(上記⑤の陳建森論文)の中核的理論として「滋味説」を提出していると見做し、その涵義を分析検討している。しかし、鍾嶸は、『詩品』中に於いて、果たして本當に評詩の規準及び詩作の原則として「滋味説」なるものを開陳しているものであろうか。このような重要且つ基本的な問題に關しては、言うまでもなく慎重な検討が是非必要であると思われる。ところが、中國の研究者は、それは自明のことと考えたのであろうか、詩品序の「五言居文詞之要、是衆作之有滋味者也」・「宏斯三義、酌而用之、幹之以風力、潤之以丹彩、使味之者無極、聞之者動心、是詩之至也」・「于時篇什、理過其辭、淡乎寡味」や詩評中の「詞彩葱蒨、音韻鏗鏘、使人味之、響聲不倦」(張協條)・「至於濟濟今日所、華靡可諷、味焉」(應璩條)という「味」字を含む事例を擧げるのみで、「滋味説」の存在に關しては、論證はおろか、ほとんどなんらの検討も加えていない。この種の重要問題を等閑にしたまま、敢えて「滋味」の涵義を分析検討している中國の『詩品』研究の現状は、我々にとって甚だ奇異な感じがする。

紹介

元來、一九五七年に刊行された羅根澤氏の『中國文學批評史』(上海古典文學出版社)に於いて、既に、鍾嶸が『詩品』中に提唱している重要事項の一つとして、確かに「詩的滋味」なるものを擧げてはいる。しかし、ここではなお「滋味」を必ずしも中核的な評詩の規準や詩作の原則などとは規定していない。羅氏は「他所謂『滋味』、雖然近于神祕、但也不過是用一種曲筆寓言、使有文字以上的意味而已」と述べるにとどめ、「滋味」をむしろ比較的輕い、中核的ならざる提唱と見做しているように受け取れる。ところが、一九六三年の吳調公論文に至っては、單に詩品序の「夫四言文約意廣、取效風騷、便可多得。每苦文繁意少、故世罕習焉。五言居文詞之要、是衆作之有滋味者也。故會於流俗、豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪。」という部分を擧げるだけで、ほとんど論證らしきものもないまま、戰鬪的な詩歌評論である『詩品』の中核的「美學理想」は、「詩味」であると規定した上で、「詩味」は『詩品』に於ける「具體的審美標準」として提出されていると斷定し、具體的に「詩味」の涵義の分析へと論を進めている。吳氏が

舉げた詩品序の文は、當世、四言詩に習熟する者はきわめて少ないのに對し、五言詩は、文學の樞要の地位を占め、諸形式のうちで最も「滋味」有るもの故、世間一般に適合するものとなつてゐると述べているのである。だから、簡潔に言えば、この文は五言詩が四言詩に比して優位にあることを述べたもので、決して「詩味」の重要性について説明したものではない。ましてや「滋味說」を提唱してゐるような文だと判定することは非常に困難である。それにもかかわらず、吳氏は、やや強引にこの文を根據に鍾嶸の「美學理想」は「詩味說」であると斷定し、その「詩味」の具體的内容について分析を進めてゐる。

鍾嶸が『詩品』中に於いて「詩味說」なるものを意識的に提唱していることが文脈上明白な場合なら、吳氏の方法も合理的と言えようが、そうでない場合は、當然、先ず『詩品』に於ける「詩味說」がどういう形で表現されてゐるかを明確に分析して、その存在を實證しておくことが必須であらう。具體的には、『詩品』の上・中・下品に見える各詩評を丁寧分析し、そこから「滋味說」の存在を歸納する

ような方法が望まれる。ところが、吳氏のみならず、上記の諸論文はすべてこの點が缺落している。たとえば、李傳龍論文は、わざわざ「『滋味』說的創立」という一節を設けているので、必ずや論證があるだろうと期待して讀んでみると、晉代から齊梁代にかけて、五言詩や用事過多の詩、聲律拘泥の詩など、詩味に乏しい詩が横行した時代狀況を概觀した後、吳氏と同様、單に詩品序の「衆作之有滋味者」の箇所を擧げるだけで、直ちに「滋味」を評詩の主要規準と斷定してしまつてゐる。詩味に乏しい齊梁の詩風に反對して書かれた『詩品』は、當然、豊かな詩味つまり「滋味」を規準としてゐるはずであるとの先入觀が潜在しているかのように見える。

以上種々不良的創作傾向、表現形式雖然不同、但有一箇共同特點、就是它們所產生的作品、都缺乏活生生的藝術形象、缺少甚至沒有詩味。鍾嶸的《詩品》、雖然是提倡五言詩的、但他正是在這一基礎上提出「滋味」說的：『五言居文詞之要、是衆作之有滋味者也。』但鍾嶸的「滋味」說却又不僅限於提倡五言、而且還把「滋味」作爲評

詩の一箇主要標準。(上記②の「論鍾嶸的『滋味』說」)

もし、鍾嶸が『詩品』に於いて「滋味說」を提唱し、評詩の規準にしていると主張するならば、詩品序の「衆作之有滋味者」という表現だけではとても「滋味說」の存在を實證したことにはならないから、李氏は、實際上に上、中、下品の評文中の表現から、鍾嶸は具體的にどこでどのように「滋味說」を展開しているかを明白にし、「滋味說」の實在を歸納するべきであろう。しかし、それは自明のこととして等閑にされ、そのまま「『滋味』的含義」へと論が進められている。これは、一九八〇年代のすべての「滋味說」関連の論文に於いて共通していることである。結局のところ、この十年間、『詩品』における滋味說の存在そのものの検討はまったく行われていないと言っても過言ではない。中國の『詩品』研究者にとっては、滋味說の存在は自明のことであるから、その關心はすでに「何が滋味か(甚麼是滋味)」(上記②蔡育曙論文)「どのような作品に滋味があるのか(甚麼樣的作品才有『滋味』?)」(上記⑤陳建森論文)という問題に完全に移ってしまったのである。この状態のままでは

あれば、『詩品』に於ける「滋味」の存在の問題はずっと検討されないままに終わってしまう可能性が強い。ただ、ごく最近、喀什の李艇氏が「論鍾嶸的詩歌批評標準——兼『滋味說』」において簡略ながら「滋味說」を否定する見解を述べておられる。しかし、これに對する反響はほとんどなく、おそらくともに受け入れられなかったのだろう、その後も相變わらず、姜小青「『滋味』解說」の如き論文が書かれ、「滋味說」の存在の究明を等閑にしたままの、舊態依然とした「滋味」の究明が行われている。この現状を見るにつけ、中國の『詩品』研究者に對して、できるだけ早く、この問題を検討し直してもらいたいと願う次第である。

この「何が滋味か」「どのような作品に滋味があるのか」という基本的な問題について、上記の陳建森氏は、なお「從來の研究者の觀點は未だ統一されていない(歴來的研究者觀點還未統一)」(⑤「鍾嶸的美學思想——『滋味』」)と述べ、その考察に努めているが、上記の各論文を見る限り、その表現や構成及び細部の解釋などに多少の相違が見られるものの、中核的な觀點についてはむしろ共通しているように見

える。そこで、次にこの共通した中核的な觀點について検討してみたい。

二、『滋味說』關連論文に見える共通した觀點

元來、學術研究というものは、たとえ小さな問題であれ、新しい發見を目指してこそ、進展が望めるというものである。同じような結論を幾つ積み重ねてみても學術の進展は望めない。とりわけ、近年においては、學術論文が飛躍的に多岐多様となり、量的にも増大し續けているので、過去現在の詳細な研究成果を知り、その成果の上に新しい研究を積み上げ、より一層の進展を期すことが是非必要である。その目的からであろう、最近、學術書や論文に關する目録・索引の刊行がとみに増加している。

しかし、中國は國土が廣大であり、各省間の學術消息が緊密に連絡されていない所爲か、あるいはなお文人相輕んずる傳統が生きている所爲か、理由は定かでないが、各研究者は互いに關連する他の論文をほとんど參考にしていないのではないかと疑われるふしがある。現在の中國には、そ

うした疑念を抱かせるほどに、相似した結論の論文が多い。『詩品』研究者に對しても、當然、従前の成果を知悉し、屋上に屋を重ねる愚舉を避け、現在までの成果の上に立つて、より高い次元に進み、新しい發見に努めることが要請される。しかし、實際には、『詩品』の論文においても、多少の相違は見られるものの、やはりほとんど相似した結論を出している場合が多い。上記の『滋味說』關係の論文にも、また幾つかの相似した結論が見られる。この結論にとくに誤解があるというわけではないが、後學者が幾篇もの同じような結論の論文を読むことはまったく不經濟なことであり、延いてはその分野の停滯や混亂を招くおそれがあるので、この際、きちんと整理し、今後どの點に重點を置いて究明すべきであるかを明確にする必要がある。

以下、この點に留意しつつ、『滋味說』に關する論文に共通して見られる幾つかの結論について整理、検討し、併せて主な二、三の論文の内容をも紹介していきたい。

先ず第一に、『滋味說』關連論文に共通して見られるのは、『指事造形、窮情寫物』を滋味の根本とする觀點である。

これは、一九五七年の羅根澤『中國文學批評史』に既に「怎樣才能有『滋味』？」他説五言詩的所以有滋味、『豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪？』と見える觀點を繼承したものと見られる。吳調公以下の各論文は、羅氏のこの見解を勝手に「滋味説」の根本を述べたものと擴大解釋してしまったようである。詩品序の「豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪」という部分は、五言詩が「文辭」の樞要の地位を占め、衆作中の「滋味」有る存在となり、ついに「流俗」に會するようになった理由として、五言詩が「事を指し形を造り、情を窮め物を寫す」ことにおいて最も適切な條件を備えているからであると述べているに他ならない。つまりこれは五言詩がなぜ「文辭」の樞要を占め、「衆作」の滋味有る存在であり得たかという理由を説明しているのであつて、決して詩の「滋味」そのものについて直接説明したものではない。それ故、羅氏はとくに「五言詩の滋味有る所以は」と斷わっているのであろう。ところが、これを繼承した各研究者は何の考證や説明もなく、直ちに「指事造形、窮情寫物」を「滋味」の根本と斷定し、その

涵義の分析に移っている。たとえば、丁捷氏の如きは「指事造形、窮情寫物——鍾嶸《詩品》的『滋味』」という標題の下に、

鍾嶸論詩、提倡『滋味』説。他認爲詩歌應當有『滋味』、『使人味之、聲聲不倦』、『使味之者無極、聞之者動心』、才是詩歌最高的境界、『是詩之至也』。

詩的『滋味』是什麼？鍾嶸在《詩品・序》中說：『指事造形、窮情寫物』、『文已盡而意有餘』是詩歌『滋味』的根本特徵。

と述べるだけで、すぐに「指事造形、窮情寫物」の涵義の分析に進んでいる。丁氏は羅氏の「五言詩の滋味有る所以は」という表現を無視し、自ら「詩の滋味とは何か」という質問を設定して、直接、「指事造形、窮情寫物」と「文已盡而意有餘」とが詩歌の「滋味」の根本的特徴であると答えているのである。いったい、「豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪」という、五言詩の特性を述べた表現を、何の分析検討もなく、詩の滋味を構成する根本要素と斷定してよいものだろうか。甚だ奇異な感じを受けるが、既に

多くの『詩品』関連の論文を著している蔣祖怡氏ですらやはり何の懸念もなく「他（鍾嶸を指す）解釋『滋味』」是指事造形、窮情寫物、最爲詳切」（鍾嶸的『滋味說』對我國詩歌發展的作用）と斷定的に述べている。このように各論文がみな同じように説いているところから見ると、あるいは中國の研究者にとって、これは自明のことなので、意識的に説明を省いているのかも知れない。もしそうだとすれば、現在、既に『詩品』は中國だけの文化遺産ではないのであるから、中國の研究者は、當然、世界各國の人が理解できるように説明すべきであろう。多くの物事が世界化してきている今日、文學研究に於いても、當然、世界に通用する普遍性が要請されているので、自國人のみにしか理解できないような閉鎖的な感覺に據る研究は決して許容さるべきものではない。

第二の共通點として、各論文には、詩作に興・比・賦三義の手法を斟酌して採用すること及び『風力』と『丹彩』とを融合統一して持たしめることが『滋味』を構成する二要素であるとする觀點が見られる。これは、『指事造形、

窮情寫物』に續く、下記の詩品序の表現に基づいて分析された見方である。

故詩有三義焉。一曰興。二曰比。三曰賦。文已盡而意有餘、興也。因物喻志、比也。直書其事、寓言寫物、賦也。宏斯三義、酌而用之。幹之以風力、潤之以丹彩、使味之者無極、聞之者動心。是詩之至也。

文脈上から、ここに挙げられている二要素が優れた詩歌創作の原理として提唱されていることは明確である。しかし、鍾嶸は決してここで「詩之至（至上の詩）」の創作原理として、「之を味わう者をして極まり無し」ということを中核に据えて、『滋味說』を提唱しているわけではない。鍾嶸はここでは、『興・比・賦の三義を宏め、適宜斟酌して用い、『風力』を根幹とし、『丹彩』によって潤澤を加えた詩は、味わう者に限りなき妙味を感じさせ、聞く者に心を感動にうちふるえさせる。こういう詩こそが至上の傑作なのである。」と主張しているのである。だからこの「使味之者無極」という表現は、對句をなす「聞之者動心」と同様、明らかに詩の創作原理として述べたものではなく、優れた詩が鑑

賞者・享受者にもたらず効果を述べたものに他ならない。

ところが、たとえば、蔡育曙の「鍾嶸的『滋味』説」では、何の説明もないまま、「使味之者無極」という表現は、直接「滋味説」を提唱しているものと見なされ、「斟酌採用興、比、賦」と「幹之以風力、潤之丹彩」という二要素は當然の如く「滋味」を創造する原理そのものと解されている。その結果、「興・比・賦」及び「風力」と「丹彩」の分析に力が傾注され、「滋味」との関係の検討が等閑にされている。また、曹旭氏が滋味説の主要論文に挙げる高起學の「談談鍾嶸的詩味説」も、順序を少しかえているものの、詩味説を構成する要素として、三義の酌用による「指事造形、窮情寫物」と「風力」と「丹彩」の融合を挙げ、この「詩味」の主張は各詩評實踐において確かに貫かれていると断定している。郁源の「鍾嶸《詩品》『滋味』解」に至っては、更に踏みこんで、鍾嶸は上記の詩品序中において單に「滋味説」を提出しているのみならず、「滋味説」の構成と由來を論述し、「滋味説」を中心とした創作理論を形成していると説明している。

紹介

鍾嶸從文學進化的歷史觀出發、認為五言詩在形式上比四言靈活、更能自由地表達思想感情、生動具體地描寫事物、所以『是衆作之有滋味者也』。鍾嶸不但提出了『滋味』説、而且論述了『滋味』説的構成和由來、形成了以『滋味』説為中心的創作理論。概括起來、主要有三箇方面。第一箇方面、便是『指事造形、窮情寫物』（中略）運用賦、比、興的藝術手法、是詩歌『滋味』的第二方面因素。（中略）『風力』與『丹彩』的統一、是構成詩歌『滋味』的第三方面因素。

これらはすべて、吳調公氏の論文の傾向を踏襲したものであり、基本的には、互いにほとんど異なるところがない。以上に述べた「指事造形、窮情寫物」「宏斯三義、酌而用之」「幹之以風力、潤之以丹彩」という三要素が鍾嶸の重要な創作理論あるいは批評原理を形成するものであることについては、すべての『詩品』研究者の公認するところであり、疑問の餘地はないが、これらを直接「滋味」の構成要素とすることについては、上述のとおり、大いに疑問がある。中國の『詩品』研究においては、せっかく熱意を

持つて滋味説の分析検討を進めてきているにもかかわらず、このような重要問題の検討を等閑にしているのは非常に遺憾なことである。今後、是非、もう一度「滋味」との関連を考察し直してもらいたい。

一方、日本及び韓國の『詩品』研究は、「滋味」に對しては非常にそつけなく、たとえば、高木正一氏『鍾嶸詩品』（一九七八年東海大學出版會）に『「滋味」は、うまい味わい。その用例は、『禮記』の月令篇に、『滋味を薄くし、和を致す莫し』、王褒の『聖主賢臣を得るの頌』に『藜を羹にし糗を喰う者は、與に太平の滋味を論ずるに足らず』などに見える」（六六頁）とある如く、すべて單に意味・用例を述べているだけで、『滋味説』に言及するものは皆無である。直接的な言明は避けているものの、日本及び韓國の研究者は、どうやら「滋味説」の存在を否定しているものと思われる。いま、素直に『詩品』を見るかぎり、決して「滋味」を中核とした創作原理や批評理論が意圖的に構築されているようには見えない。しかし、『詩品』中には、たとえば「于時篇什、理過其辭、淡乎寡味」（詩品序）・「至於濟濟今

日所、華靡可諷味焉」（應璩條）の如く、明らかに詩の「味」について言及した部分が存在しているのであるから、鍾嶸が實際の評詩に際して「詩味」という概念を導入していたことは確實であろう。それ故、『詩品』中において、鍾嶸は「詩味」をどのような形で表現し、どのように認識していたかという問題を究明することは、是非必要なことである。また、『詩品』中の「詩味」という概念は、唐の司空圖の「辨味説」、宋の嚴羽の「興趣説」、宋の楊萬里の「風味説」、清の王士禎の「神韻説」、王國維の「境界説」等に影響を与えているという文學史上の問題點から言っても、その實態を明確にしておく必要性がある。その點、日本や韓國の研究のようになつた「詩味」について言及しないという姿勢は、明らかに『詩品』研究として甚だ不十分であり、大きな缺落があると認められる。これに對して、中國の『詩品』研究は、鍾嶸が「滋味説」を中核とした理論を構築しているという結論にやや行き過ぎがありはするものの、既に眞摯に「滋味」乃至「詩味」の究明を實踐してきているだけに、日本や韓國の研究者にとっては、特に

學ぶべき點が多い。

三、「滋味」乃至「詩味」の涵義について

吳調公氏は、「說詩味」中の「二、鍾嶸的美學理想——詩味」において、まず鍾嶸の「詩味」の第一の特徴は「指事造形」、第二の特徴は、「窮情寫物」であるとした上で、「指事造形」とは的確に事物の狀貌を描寫すること、「窮情寫物」とは事物の描寫によって感情を抒發することであると解釋している。また、「指事」には「直書其事、寓言寫物」の意味があり、比較的鍾嶸の言うところの「賦」の作法に近く、「窮情寫物」の目的は「情を物に融合し、物に借りて情を抒べる」ことであると説明している。このような解釋に至る分析・考證として、吳氏は單に鍾嶸が自然の景物を精細に觀察、描寫した謝靈運を賛美し、その優點は「巧似」にあると述べていることや詩人の感興は外物の刺激に起源していることなどを擧げているに過ぎず、甚だ不十分であると言わざるを得ない。しかしながら、この解釋は誤解というわけではないから、次のように繼承され、基本的には

現在までほとんど變更されていない。

高起學論文（一九八〇年）——「指事造形」是指準確地敘述客觀事物。「窮情寫物」就是要很好地描繪自己對生活的感受、深刻地抒發思想感情。

郁源論文（一九八三年）——所謂「指事造形」就是準確地描繪事物的狀貌。其（指「窮情寫物」）意思是：對具體的形象描繪要與主觀情感的抒發相一致、而情感的抒發也不能離開對事物的形象描繪、借物抒情、融情于景、達到主客觀的統一。

齊魯青論文（一九八五年）——「指事造形、窮情寫物」具有兩箇層次的意義、其一是造形、其二是窮情。造形對客觀事物的具體形象的藝術描繪；窮情是通過鮮明生動的藝術形象來抒發詩人的內在情懷。

蔡育曙論文（一九八七年）——「指事造形」意為作家將自己所歷所感所見的事情和物象敘述描摸出來、以構造文學藝術形象「窮情寫物」則是重情。要求將情感融滙于所描繪的物象、又以物象為媒介來抒發情感。

韓進廉論文（一九九〇年）——「指事造形」、指準確地刻畫事

物的形貌；『窮情寫物』、指通過具體形貌的描繪抒發深
刻的思想感情。

事物の狀貌を的確に描寫すること（「指事造形」）や事物の描寫によつて感情を抒發すること（「窮情寫物」）は、優れた五言詩の創作原理として確かに機能するであろうが、はたしてそのまま「滋味」を構成する要素として通用し得るものであるかどうか、甚だ疑問である。「指事造形、窮情寫物」を「滋味」の特徴を述べたものと解釋する以上、先ず『詩品』全體から鍾嶸は具體的に「滋味」をどのようなものと認識していたかについて歸納し、それと「指事造形、窮情寫物」との關連を明確に説明する必要がある。つまり、鍾嶸は、事物の狀貌的確な描寫によつて、どうして滋味ある詩が創作できると考えていたのか、事物の描寫による抒情によつて、どのような詩味が醸成されると思つていたのか、このような問題に答えることが是非必要なのである。しかし、残念ながら吳氏以下、誰もそれにまともに答えてゐる者はいない。これは、今後解決すべき課題の一つであろう。

これに續いて、吳氏は、「窮情」について、鍾嶸は詩味中の感情として殊に「慷慨怨悱之情」を突出させ、重視していると述べている。その證據として、上品序にある「楚臣去境、漢妾辭宮」以下の舉例と下品にある「五言之警策」の舉例がともに「怨」に關する事例で占められていること及び具體的評論中に「怨」を重視した審美規準が見られることを擧げてゐる。確かに、『詩品』中には、古詩の「意悲而遠、驚心動魂、可謂幾于一字千金。（中略）雖多哀怨、頗爲總雜」や李陵の「文多悽愴、怨者之流（中略）使陵不遭辛苦、其文亦何能至此」を始めとして、「怨」の感情を抒發した詩が高く評價されている場合が非常に多い。この事象から見て、鍾嶸が「怨」の抒情ということを評詩の一規準としていることは明らかである。このことは、「滋味說」關連の論文に限らず、ほとんどの『詩品』の論文に早くから指摘されていることで、既に定説化している。しかし、この「怨」なる審美規準と「詩味」との關係については、鍾嶸は『詩品』中において直接的に言及していない。それ故、兩者の關連を言う場合には、必ず『詩品』のどこに、

どのような形で、その關連性が潜在的に敘述されているかを明確に説明する必要がある。鍾嶸は「味」ある詩を創作するためには、「怨」という要素が是非必要と認めていたであろうか。また「怨」の感情を強く抒發している詩には、必ず「滋味」があると認識していたのであろうか。これらの問いに對しても、吳氏以下の論文は、いまだなんらの解答も出してはいない。

この外、吳氏は、「指事造形、窮情寫物」を「詳切（指構思和描寫的細致和深刻）」の域にまで達成することは容易なことではないが、詩品序では、これを達成するためには「三義（賦比興）の酌用」が必要であると主張されていると解した上で、そこに見られる「若專用比興、患在意深、意深則詞蹟。若但用賦體、患在意浮、意浮則文散」という表現を「詩味」と關連づけて解釋し、更に續けて司空圖の「詩味論」への影響を説いている。

「酌而用之」的效果自然就是作品的詳切、也就是細而不冗、深而不晦的詩味。後于鍾氏四百年的司空圖在這方面似乎也受了影響。他在談到詩味時倡論「近而不浮、遠

紹介

而不盡」之說。「近」有點類似「詳」、「遠」有點類似「切」。「詩味」と「意深（指隱晦蹇澀）」「意浮（指冗贅散漫）」との關係については、他のこと同様、やはり分析考證が十分であるものの、この兩者の關連に焦點を當てて「詩味」を考察しようとする吳氏の觀點には注目すべきものがある。また、吳氏が鍾嶸の「詩味」という概念は、南齊の畫家謝赫の「六法」に影響を受けていると指摘しているのもなかなか興味深い。兩問題ともに、今後、もう少し詳細に検討すべき課題であらう。

その後、吳氏は、「三、鍾嶸詩味的美學理想在詩歌評論中的貫徹」において、上・中・下品一百二十餘人の五言詩作家に對する評價の際、「鍾嶸詩味的美學理想」が實際どのように貫徹されているかを檢證すべく、「鍾嶸の贊美する作家の優點」を（一）怨悱的感情、（二）意境的深微婉轉、（三）詞采的華淨之美の三項目に分けて分析檢討を加え、鍾嶸の各詩人に對する具體的評論と詩品序中の「詩味論」とは基本的に統一している（鍾嶸對作家具體評論和《詩品》總論中的詩味論基本上是統一的）と結論している。吳氏のこの方法に

は少々誤解を導き出し易い危険性が胚胎している。すなわち、上述のような詩品序のはなはだ不安定な分析によって、先に「詩味」は「鍾嶸的美學理想」であると結論づけておいて、それに適應しているものを實際の詩評中から探し出すというような方法は、どうしてもつい自説に合致した表現ばかりに目がゆき、客觀的に全體の表現を見落とす危惧があるからである。吳氏のみならず、多くの「滋味說」關連論文にこの方法が用いられているが、ほとんど自説に合う部分を探し出すことにのみ腐心し、あまり全體を見ていない傾向にある。これでは到底説得力有る結論を出すことは無理であろう。「詩味」は「鍾嶸的美學理想」であるという結論を出す前に、先ず詩品序の表現と一百二十餘人に對する詩評の兩方を並行して検討し、「詩味」とはどのようなものを歸納した後、これが果たして鍾嶸の「美學理想」であるかどうかを検證すべきであろう。

いま「滋味說」關連の論文において初期に屬する吳氏の論文を見てきたから、次には一九九〇年に發表された韓進廉氏の「辨于味而後可以言詩也——評鍾嶸『滋味』說的審美

價值」について検討していきたい。これによっておおよそ近年の「滋味」の究明がどれだけ進展したかを見ることが出来るからである。

韓氏の論文もそれ以前のものと同様、いきなり、鍾嶸『詩品』の品評標準は「滋味說」であると決めつけ、「滋味」は「詩歌鑑賞的美學標準」であるとともに「詩歌創作的美學原則」であると斷定している。その上、「指事造形、窮情寫物、最爲詳切」を「滋味」の第一要素として挙げ、「指事造形」は「正確地刻畫事物的形貌」、「窮情寫物」は「通過具體的描繪抒發深刻的思想感情」と解している。このところは、吳調公論文とほとんど同じであると言ってよい。更には三義（賦・比・興）の酌用による「主觀情緒」と「客觀物象」の相互融合と、「幹之以風力、潤之以丹彩」による内容と形式の「完美」的統一を「滋味」の第二要素とし、「幹」は「骨幹」、「風力」は「内容」を指し、「情感」と「文氣」を包括し、「潤」は「潤色」・「修飾」、「丹彩」は「形式」を指し、「音韻」と「詞藻」を包括していると解している。これもまた従前の論文とほとんど變わるところは

ない。ただ、相違点としては、五言詩が四言詩に比べて「滋味」有る理由を、今人褚斌傑の「語言學」による解析を引用して説明しているぐらいのことである。しかし、この説明も、一般的に五言は「奇偶相配」しているから、四言に比較して變化があり、單調でないことを證しているだけで、決して『詩品』中に言う五言の「滋味」の特徴を説明し得るようなものではない。

續いて韓氏の論文は、「滋味」説は齊梁詩壇における創作の不良傾向に「針對」して提出されたものであるとし、『詩品』中に（一）借詩談玄（二）冗溺聲律（三）用典隸事といった齊梁の弊風に對する攻撃が盛んに見られることを指摘している。しかし、これも吳調公論文が『詩品』は「爲辨明『美醜』、分清『朱紫』而奮鬪的詩歌評論」と規定して以來、たとえば、陳建森論文が「『滋味』説は鍾嶸針對齊梁詩壇出現的不良傾向、有的放矢、而且是處在箭在弦上不得不發的境地而提出來的」として、「第一稍尙虛談」、「第二是以典故、古語爲詩」、「第三是一味追求聲律」の三傾向を舉げて説明している如く、ずっと指摘され續けてきたこと

で、なんらの新味も見られない。

次に韓氏は、鍾嶸『詩品』は「辨『味』」から入手し、彼獨特の評詩方法を形成していると指摘している。すなわち、『詩品』は「『滋味』的有無多寡」を以て「藝術標準」となし、貴賤や親疎などによって品等の昇降・詩歌の優劣を決定するようなことはなかったと斷定しているのである。韓氏は、所謂「『滋味』の有無多寡」は鑑賞の角度から言うとき、主として、「一、風力を尙ぶ」「二、華靡を喜ぶ」「三、典雅を貴ぶ」の三項目によって決定されていると解析しているが、このことは、やはり一九七九年の李傳龍論文が「『滋味』を以て藝術標準と爲す」として分析を加えて以來、既にずっと同様の分析がなされてきていることであり、ここに格別の進展があるわけではない。

最後に韓論文は、鍾嶸の「滋味説」が後世の詩歌理論と美學思想に重大な影響を與えたとして、具體的には陳子昂・李白・司空圖・楊萬里・王漁洋の「詩味」に關する詩論を例に舉げて説明している。これは、「滋味説」を否定しているが如きに見える日本や韓國の『詩品』研究には確か

に見られない点ではあるが、中國では李傳龍論文の「『滋味』説の歴史的意義」に指摘されて以來、多くの論文において同様の分析があり、残念ながら、ここにも新しい発見は見られない。

以上の検討から一九九〇年の韓進廉論文は、一九六三年の吳調公論文の水準とほとんど變わらず、「滋味説」に関する究明においては、結果的にはあまり進展はなかったと言っても過言ではなからう。こういう事態を招来しているのは、おそらく最初に述べたように中國では他の論文の成果を十分に参考にしない所爲ではないかと推測される。もし他の論文の成果を参考にして、それに積み上げていたなら、これほど類似したものにはならず、異なった視點からの検討が行われ、必ずや一定の進展が見られただろうと惜しまれる。もし、また日本や韓國の『詩品』研究を参考にしていたなら、少なくとも、「滋味説」に疑問を持つ研究者の存在が分かり、「滋味説」の存在そのものから検討し直す必要性が理解されたはずである。最近、上海師範大學の優れた氣鋭の研究者曹旭氏が「鍾嶸《詩品》在日本的流傳與影響」

中で、中國古典文學研究においても、世界の研究成果に注目し、これを参考にすべきであると力説しているのは、その意味でまったく正しい方向を指し示していると言えるう。

なお、上記の「滋味説」関連の論文中で異色のものは、王小剛氏の「從接受美學理論看鍾嶸的『滋味』説」である。これは「接受美學」の理論角度から、つまり創作の立場からではなく、享受者側から「滋味説」を解析しようと試みたものである。その方法は、他の論文とまったく異なる斬新なもので、應用の仕方次第では相當の進展が期待される。しかし、實際の王氏の究明においては、「『滋味』説は接受主體の一種の情緒體驗である」「『滋味』説は接受主體心中の一種の境界である」「『滋味』説は一種の審美快感である」というような現代の「接受美學」の觀點から「滋味」の内容を抽象的に漠然と解説することに終始し、鍾嶸の主張する「滋味」の内容を『詩品』の表現に沿って具體的に分析することはほとんどない。これではせっかくの斬新な方法もまったく効果がなく、むしろ鍾嶸『詩品』の「滋味」の

實態究明からかえって遠く離れてしまっている感じが強い。

一般に中國の古典文學研究においては、論理的整合性を重視するあまり、考證を疎略にしていることが多い。上記の「滋味説」関連の論文においても、全般的に論理優先、考證輕視の傾向が強い。上述の論文のほとんどは、先ず、序文中に見える齊梁の詩壇に對する攻撃的な批判を根據に舉げて、鍾嶸『詩品』は齊梁の不良文學風氣を矯正せんとする戰鬪的評論書であると規定している。この點は、まだ『詩品』に内在する確たる根據をあげての規定であるだけにあまり問題はないが、その齊梁の弊風を詳細に分析しないままに、弊風の一つである「玄言詩」に對する批判に「理過其辭、淡乎寡味」とあるのを見て、これを根據にすぐに「滋味」乃至「詩味」が弊風矯正のための「中核的旗幟」、すなわち鍾嶸の批評基準・創作原理であると判定しているのは、あまりに考證不足と言わざるを得ない。詩品序自身を少し丁寧に考察するだけで、鍾嶸が強い批判を加え、矯正すべき對象としているのは、「玄言詩」ではなく、むしろ曹植・劉楨を「古拙」と笑い、鮑照・謝朓を模範とする「輕薄之

徒」や典據・聲韻に拘泥し過ぎる任昉・沈約一派であることは明白である。また、『南齊書』『梁書』『文心雕龍』などの記述を見ても、齊梁の詩壇においては、謝靈運派、應璩派（古體派）、鮑照派（永明體派）などが盛行しており、東晉に流行した「玄言詩」は、もはや衰退してしまっていたことを明確に示している。少しでも地道な考證を尊重する姿勢がありさえすれば、このような事實を無視した強引な判定が出てくるはずがない。多くの「滋味説」論者は、「實事求是」の精神を忘却し、まるで「詩味」は『詩品』の中核的原理であるとする自らの信奉を正當化するためにのみ論を展開しているごとくである。強引な展開であれ、一旦、「詩味」は弊風矯正の「中核的旗幟」であると判定されてしまうと、論理上の當然の歸結として、次ぎには『詩品』の中心的な主張である「指事造形、窮情寫物」「宏斯三義、酌而用之、幹之以風力、潤之以丹彩」ということが、具體的に「滋味」を構成する要素と判定されることになってしまふ。それ故、「滋味説」論者にとっては、「詩味」と『詩品』の中心的主張である「指事造形、窮情寫物」「宏斯三義、酌

而用之、幹之以風力、潤之以丹彩」とは當然等しくなるので、その關連性をわざわざ論證する必要などまったくなかったのではなからうか。このような「滋味說」信奉者の究明法には、また、「指事造形」「窮情寫物」以下の具體的な内容の解釋に至っても、過去・現在にわたる用語の克明な分析を通して着實に究明しようとする姿勢が缺如していることが多い。いくら感覺的に鋭い結論であっても、論證を伴わないものは、科學としての學問の名に値しないのではなからうか。結局、全般的に「滋味說」關連論文に缺けていたのは、大きく言えば「實事求是」の精神、細かく言え

ば地道な考證ということになるう。

今後、中國の氣鋭の學者を中心にして、たとえば、拙論『詩品研究法の檢討と『五言之警策』問題等の究明』『學林』第十四・十五號)において提唱した「(1)各版本の校勘に據る究明(2)所載叢書の性質分析に據る究明(3)『詩品』に内在する表現法則に據る究明(4)從來の出典・典據を探查する方法の徹底」といった各方法を有機的に總合した究明法を採用して、的確な考證に據る『詩品』研究が展開され、眞の「滋味」の内容が究明されることを期待したい。なお、紙幅の都合上、逐一論文の内容を紹介することは割愛した。

注

中國における一九八〇年以降の『鍾嶸詩品』研究を一氣に分析検討し、論述することは、紙幅の關係上、少々困難であるから、次に一便法として論文・專著名一覽を挙げ、これによって全體の傾向を示唆しておくことにする。

研究論文

【一九八〇年】

鍾嶸對六朝詩風的批判
鍾嶸談賦比興涵義及其運用
讀《詩品・宋徵士陶潛》札記
談談鍾嶸的詩味說

劉文忠
哈爾濱師院
李文初
高起學

江淮論壇
『形象思維資料匯編八〇年』
文藝理論研究
人文雜誌

一九八〇年一期
人民文學出版社
一九八〇年二期
一九八〇年三期

淺談鍾嶸的「滋味」說

鍾嶸與《詩品》考年及其它

鍾嶸《詩品》的詩歌評論

鍾嶸《詩品》陶詩源出應璩解

【一九八一年】

《詩品》

論鍾嶸的文學思想

『三品論士』不公的祕密

鍾嶸《詩品》與時代風氣

【一九八二年】

鍾嶸的美學思想——「滋味」說

我國古代第一部詩歌批評專著——《詩品》

從鍾嶸的詩法原則看賦、比、興的運用

論鍾嶸《詩品》的曹陶品第

詩品序分析

吟詠情性——鍾嶸詩品詩歌批評的理論基礎

論鍾嶸詩論的現實主義性質

【一九八三年】

鍾嶸《詩品》管窺

鍾嶸《詩品》的詩歌創作論

鍾嶸《詩品》四辨

從《詩品》的批評標準看鍾嶸的文質觀

「顯優劣，辨品第」的詩論著——讀鍾嶸《詩品》

介紹

武顯漳

段熙仲

陳思岑

王運熙

常振國

張少康

李伯勛

王運熙

陳建森

蕭華榮

何文忠

許總

繆萬全

蕭華榮

李傳龍

陳適冬

周剛

蔣祖怡

梅運生

張少康

思想戰線

文學評論叢刊第五輯

同 右

文學評論

文史知識

文藝理論研究

社會科學（甘肅）

文學評論叢刊第九輯

河池師專學報

文學知識

寫作

中州學刊

東北師大函授教學

古代文學理論研究第七輯

文學遺產增刊一四輯

藝文志第一輯

沈陽師範學院學報

蘇州大學學報

安徽師大學報

文學知識

一九八〇年三期

一九八〇年三月

一九八〇年五期

一九八一年五期

一九八一年四期

一九八一年二期

一九八一年

一九八二年一期

一九八二年三期

一九八二年四期

一九八二年六期

一九八二年一四期

一九八二年

一九八二年

一九八三年

一九八三年一期

一九八三年一期

一九八三年二期

一九八三年二期

一九八三年二期

一九八三年二期

一九八三年二期

一九八三年二期

鍾嶸《詩品》的批評標準與理論精華

鍾嶸《詩品》“滋味”解

鍾嶸論建安文學

論鍾嶸詩品的審美理想與批評標準

鍾嶸論詩

鍾嶸的詩歌理論和詩評

論鍾嶸《詩品》的溯流別

鍾嶸《詩品》論詩的特點

劉勰與鍾嶸文學思想的差異

從《詩品》看屈騷對魏晉南朝詩歌的影響

鍾嶸

【一九八四年】

鍾嶸《詩品》三題

指事造形 窮情寫物

——鍾嶸《詩品》的“滋味”說

鍾嶸《詩品》的理論體系（上）

鍾嶸《詩品》的理論體系（下）

論《詩品》

劉勰與鍾嶸文學觀對立說商榷

從推崇曹植看鍾嶸的文藝思想

鍾嶸的身世與《詩品》的品第

鍾嶸詩歌音韻觀述評

鍾嶸的詩品

顧農

郁沅

蕭華榮

蕭華榮

蕭文苑

陳必勝

常振國

振甫

蕭華榮

毛慶

牟世金·蕭華榮

蕭華榮

丁捷

賈樹新

賈樹新

王運生

鄒國平

沈悅齋

梅運生

魏怡

亦云

河北師範大學學報

江漢論壇

安徽師大學報

齊魯學刊古典文學專號

太原文藝

黃石師院學報

柳泉

柳泉

中州學刊

江漢論壇

中國著名文學家評傳第一卷

山東大學文科論文集刊

鄭州大學學報

松遼學刊

松遼學刊

昆明師專學報

文藝理論研究

華東大學報

安徽師大學報

常德師專學報

自修大學

一九八三年二期

一九八三年二期

一九八三年三期

一九八三年三期

一九八三年四期

一九八三年四期

一九八三年五期

一九八三年六期

一九八三年六期

一九八三年一期

一九八三年

一九八四年一期

一九八四年一期

一九八四年二期

一九八四年二期

一九八四年二期

一九八四年三期

一九八四年三期

一九八四年四期

一九八四年五期

一九八四年七期

詩品介紹

人格美與清水出芙蓉的審美趣味——鍾嶸詩品讀書札記

淺談鍾嶸的「直尋」說

鍾嶸的詩歌理論

鍾嶸《詩品》謝靈運條疏證

【一九八五年】

鍾嶸與司空圖詩「味」說辨

鍾嶸和他的《詩品》

讀鍾嶸《詩品》札記

——關於范雲和丘遲的詩歌風格

論鍾嶸開創的「滋味」說

略論鍾嶸《詩品》評詩的標準及其它

鍾嶸《詩品》的詩歌批評體系

鍾嶸的「滋味說」對我國詩歌發展的作用

《詩品》三考

劉勰和鍾嶸文學批評方法的比較

【一九八六年】

鍾嶸《詩品序》文學思想的再認識

——《魏晉南北朝文學論文名篇注釋》評述之一

淺談詩話體的流變

從《文心雕龍》、《詩品》的極限性

看時代風氣對文學批評的影響

鍾嶸《詩品》的批評方法論

紹 介

沈玉成

羅立乾

武順漳

呂德申

張伯偉

王之望

鍾涵

陳思苓

齊魯青

王克斌

蕭華榮

蔣祖怡

李伯勛

譚帆

郭正元

劉國珏

張明非

張伯偉

電大文科園地

美的研究與欣賞

文學遺產

中國文藝思想史論叢(1)

中國文藝思想史論叢(1)

牡丹江師院學報

學術文摘

文學遺產

內蒙古大學學報

雲南師範大學學報

文學評論

杭州大學學報

社會科學(甘肅)

學術月刊

中山大學學報

天津教育學院院刊

廣西師範大學學報

中國社會科學

一九八四年十期

一九八四年十二期

一九八四年

一九八四年

一九八五年一期

一九八五年二期

一九八五年二期

一九八五年二期

一九八五年二期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

一九八五年三期

鍾嶸《詩品》初探

謝文學

許昌師專學報

一九八六年三期

《畫品》與《詩品》——鍾嶸《詩品》探源

蔣祖怡

杭州大學學報

一九八六年三期

鍾嶸《托詩以怨》說漫評

單世聯

西北師院學報（蘭州）

一九八六年四期

托詩以怨尋繹

林天鈞

內蒙古大學學報

一九八六年四期

鍾嶸《詩品》論詩人的繼承關係及其流派

王運熙

中州學刊

一九八六年六期

文心雕龍與詩品

吳林伯

文心雕龍學刊第四輯

一九八六年

試析劉勰鍾嶸的詩論

蔣祖怡

文心雕龍學刊第四輯

一九八六年

《詩品》評語與張華詩風

曹旭

光明日報

一九八六年四月八日

鍾嶸《詩品》論“奇”

王運熙

光明日報

一九八六年七月二九日

【一九八七年】

謝朓詩品略辨

李太斌

南充師學院學報

一九八七年一期

鍾嶸《詩品》校考

曹旭

中州學刊

一九八七年一期

從《詩品》品第准的看張華詩歌品第

徐宗文

鹽城師學報

一九八七年一期

我國古代卓越的文學理論家——鍾嶸

劉溶

南陽師專《南都學壇》

一九八七年一期

鍾嶸與歌德文學思想比較論

韓湖初

語文輔導（華南師大）

一九八七年一期

——兼談唯物主義創作理論的歷史發展

鍾嶸的“滋味”說

蔡育曙

雲南民族學院學報

一九八七年二期

鍾嶸詩論的“直尋”主張

歐陽世昌

中山大學學報

一九八七年二期

鍾嶸及其《詩品》三考

謝文學

中州學刊

一九八七年三期

從接受美學理論看鍾嶸的“滋味”說

王小剛

河池師專學報

一九八七年四期

詩文的“魂”與“魄”

李和明

閱讀寫作

一九八七年四期

鍾嶸《詩品》的曹操、劉楨品第

張亞新

中州學刊

一九八七年五期

鍾嶸《詩品》名次排序變例說

鄒國平

中州學刊

一九八七年五期

《詩品》研究概觀

【一九八八年】

“詩言志”、“詩緣情”與鍾嶸的“性情”說
簡論《詩品》的品風

《詩品》研究的新成果

——評新出版的三種鍾嶸《詩品》注

鍾嶸《詩品》在日本的流傳與影響

評車柱環教授《鍾嶸詩品校證》

——兼談古代文論校勘中的幾箇問題

鍾嶸批評標準的現代闡釋

鍾嶸論詩主怨的深層結構

《詩品》的“奇”

鍾嶸風格理論漫評

鍾嶸詩論與劉勰詩論的比較

《鍾嶸詩品譯注》評議

關於曹操等人在詩品中的品第問題

《詩品》評陶詩發微

日本與詩品研究

鍾嶸《詩品》“駁聖”解

鍾嶸以“怨”品詩及其原因和意義

【一九八九年】

怎樣評價鍾嶸《詩品》的曹操品第
“滋味”與“興象”

介紹

尙定

語文導報（杭州大學）

一九八七年五月

謝福堂

張家口師專學報

一九八八年一期

賈樹新

東北師大學報

一九八八年一期

曹旭

文學遺產

一九八八年二期

曹旭

中州學刊

一九八八年二期

張伯偉

南京大學學報

一九八八年二期

沈波

中州學刊

一九八八年三期

張元五

四川教育學院學報

一九八八年三期

賈樹新

松遼學刊

一九八八年三期

叢金玉

河南師範大學學報

一九八八年三期

王運熙

文學評論

一九八八年四期

徐達

貴州大學學報

一九八八年四期

葛景春

中州學刊

一九八八年四期

曹旭

復旦學報

一九八八年五期

曹旭

中文自修

一九八九年七期

徐達

貴州社會科學

一九八八年一二期

顏家安

湘潭大學學報古典文學專輯

一九八八年

謝文學

許昌師專學報

一九八九年一期

李天道

青海師範大學學報

一九八九年一期

——《詩品》《河岳英靈集》沿革比較研究

鍾嶸《詩品》作年考

——兼考《詩品》的三篇序文

鍾嶸詩論及其批評標準

鍾嶸身世考

《詩品》的稱名及序言的位置

鍾嶸《詩品》研究綜述

【一九九〇年】

鍾嶸的當代詩歌評論

辨于味而後可以言詩也

——評鍾嶸《滋味》說的審美價值

陳延傑《詩品注》校疑

談古代文論中的品評批評

錢鍾書論《詩品》

——讀《談藝錄》、《管錐編》札記之一

論鍾嶸的詩歌批評標準——兼論《滋味說》

論西晉詩人張華

論鍾嶸《詩品》對顏延之詩歌的評價

《詩品》探源

《詩品》譯注書及研究書

蕭華榮『《詩品》注釋』（《文賦》注釋と台訂本）

向長青『詩品注釋』

蔡祖怡

杭州大學學報

一九八九年二期

徐達

貴州大學學報

一九八九年四期

曹旭

上海師範大學學報

一九八九年四期

曹旭

中州學刊

一九八九年五期

曹旭

文史知識

一九八九年一一期

陳慶元

中州學刊

一九九〇年一期

韓進廉

河北師範大學學報

一九九〇年一期

蔡文

松遼學刊

一九九〇年一期

曾維才

文藝理論研究

一九九〇年二期

徐達

貴州民族學院學報

一九九〇年四期

李艇

喀什師範學院學報

一九九〇年四期

曹旭

上海師範大學學報

一九九〇年四期

錢鋼

中州學刊

一九九〇年五期

張伯偉

南京大學學報

一九九〇年五、六期

鄭州中州古籍出版社
齊魯書社

一九八五年
一九八六年

紹
介

呂德申『鍾嶸詩品校釋』
趙仲邑『鍾嶸詩品譯注』（中國古典文學理論名著）
羅立乾『鍾嶸詩歌美學』
徐達『詩品全釋』（中國歷代名著全釋叢書）
梅運生『鍾嶸和詩品』（中國古典文學基本知識叢書）
禹克坤『《文心雕龍》與《詩品》』（祖國叢書）

北京大學出版社
廣西人民出版社
武漢大學出版社
貴州人民出版社
上海古籍出版社
人民出版社

一九八六年
一九八七年
一九八七年
一九九〇年
一九八二年
一九八九年
清 水 凱 夫
（立命館大學）